

山の別荘の少年

豊島与志雄

青空文庫

私は一年間、ある山奥の別荘でくらしただけです。なかば洋館づくりの立派な別荘でした。番人をしていいる五十歳ばかりの夫婦者と、その甥おいにあたる正夫まさおという少年がいるきりでした。私は正夫とすぐに親しくなつて、いろいろなことを語りあい、いろいろなことをして遊びました。たくさん思い出があります。そのいくつかをお話ししましょう。

一 さくら

別荘の裏手の山つづきのところに、たくさん桜の木がありました。春になるといっぱい花がさいて、家ぜんたいが、花にだかれたようになりました。

山奥の桜の花は、じつにきれいで、都会の公園の花のように埃ほこりをかぶっていませんし、平野の花のように色あせていません。花びらがみずみずしくてくつきりと白く、ほんのりと赤みがういて見えます。それが無数にさきみだれて、その間から、かわいい小さな葉が、緑色に笑いだしています。

朝日がさすと、白い綿のようですし、夕日がさすと、うす赤い綿のようです。月の光が

さすと、夢のなかの雲のように見えます。

ある晩、私は窓をあけて、月の光がいつぱいさしてるなかで、桜の花をながめました。それから外に出て行って、花の下を歩きました。

幹の影と自分の影とが地面にくつきりうつつていましたが、花は月の光をとおして、ぼーとうす明るく、まったく白雲しろくものようでした。

その白雲の下に、向こうに、正夫がぼんやり立っていました。

私はほほえんで近づきました。

「桜の花は、月の光で見るのがいちばんきれいだねえ」

正夫は私の顔を見たり、いつまでもだまっています。

「どうしたの」と私はたずねました。

「だって、僕心配なもの」

「何が？」

「この木ですよ」

正夫が指さしたのを見ると、それはひとときわ大きな桜の木で、まるく枝をひろげて、しなうほどいつぱい花がさいていました。日傘ひがさの上に白い雲と月の光がつみかさなつたよう

で、じつにみごとでした。

その木を見てるうちに、私にも、正夫の心配がはつきりわかってきました。

昼間のことでしたが、遠いところから、ここの桜の花のことをきいて、えらい人が見物に來たのです。そして花を見てしきりに感心していましたが、ただ一つおいしいことがある、といただきました。それは、桜の花に匂いが無いということでした。

「これほどきれいに咲いてるのだから、これに、梅の花のようなよい匂いがあつたら、さぞよいだろう」

その言葉を、正夫の小父さんがききとがめました。そして、どうかして匂いをつける仕方はあるまいかと、相談しました。するとその人は、植物のことなら何一つ知らないことはないというほどえらい学者で、桜の花に梅の花のような匂いをつけてあげようと、引き受けたのでした。ある薬を桜の幹に注射するんだそうです。けれど、その薬はたいへん貴いもので、たくさんはないから、いちばん立派な大きい桜の木を一本えらびました。

「一本でもけつこうです」と小父さんは叫びました。「それこそ、日本一の……世界一の……桜になります」

その注射が、今晚なされることになっていました。すると、明日、朝日がさす頃になる

と、桜の花は梅の花のようなよい匂いをたてるそうでした。

正夫は私の顔を心配そうにながめました。

「大丈夫でしょうか。注射つて、いたいでしょうね」

「そうだねえ……」

考えてみると、私も心配になってきました。

けれど、もう仕方ありませんでした。向こうから、小父さんに案内されてあの人がやってきました。シルクハットをかぶり、ぴかぴか光る靴をはき、小さな鞆かばんをかかえ、ながい口髭くちひげをぴんとはやし、鼻眼鏡はなめがねをかけ、眼鏡めがねのふちから一本のほそい金鎖をたらし、それを襟えりもとにとめていました。いかにもえらい学者のようでしたが、しかし、その鼻眼鏡のおくに光つてる目が、なんだか気味きみわるく思われました。

「ああ、この木でしたな」

学者はそこに立って、いっぱい咲いてる花を見あげました。それから、その根本にかがんで、鞆かばんをひらきました。しばらくかちやかちややってから、注射器をとりだしました。置針たたまはりのような大きな針がついていました。彼はしばらく、幹みきをなでていましたが、いきなり、ぶすりと針をさしました。

私はぞつとしました。私の手をにぎっていた正夫も、ぎくりとしました。桜の木は、私たちよりもいつそうびくりとふるえて、花がひらひらとちりました。

学者は反対の方にまわって、も一度、注射の針をぶすりとさしました。花がまたひらひらとちりました。学者は鞆から小さな白っぽいものをとりだして、注射のあとにはりつけました。よく見ると、それはブリキの板でした。

「これでよろしい」

学者はそういつて、小父さんといっしよに戻っていききました。

私と正夫は、手をとりあつたまま、そこに残っていました。なんだか心配でたまりませんでした。

いつのまにか、月の光がうすれて、東の空が白んできました。どこかで、小鳥の声がします。そして、空に赤い光がながれて、つめたい風がそよそよと吹いてきました。その時、桜の花がはらはらとちりはじめ、それと共に、たいへんよい匂においが、あたりにひろがってきました。

注射がきいたのでしょうか。たしかにそうでした。花がちるといっしよに、なんともいえないよい匂いが、あたりいちめんにただよって、息をつくのも苦しいほどでした。けれ

ど、どうしたことか、花はしきりにちつてやみませんでした。よい匂いにおといつしよに、白い花びらが、ひらひらひらひら、しきりにまいおちて、雪のように地面につきまりました。そのきれいな美しさは、何ともたとえようがありませんでした。

そして、朝日の光がさしてくる頃になると、その桜の木の花はすっかりちつてしまい、緑の小さな葉もちつてしまい、よい匂いもどこかに消えうせてしまつて、あとにはただ、はだかの枯木かれきが残つてただけでした。

私は、その枯木をぼんやり見あげました。

正夫は、ふいに泣きだしました。

「小父さんに知らしておいでよ」と私はいいました。

正夫はかけだしていききました。

私は枯木にさわってみましたが、もうどうしようもありませんでした。ほかの木はいっぱい花をさかせ、小さな葉をだしているのに、その一本だけが、はだかのままで、さびしく立つてゐるのです。私はその近くを、いつまでも歩きまわりました。

がやがや、人声がありますので、ふり向いて見ると、小父さんが先にたつて、四五人の村人がやつて来るのでした。

縄なわや鋸のこぎりや斧おのをもっています。

私はびつくりして、口がきけませんでした。村人たちはもう、枯れた木に縄をつけ、その根本ねもとを、鋸のこぎりでひいたり、斧おので切ったりして、うちたおそうとしています。こーん、こーん……という斧の音が、私の胸にしみ通ります……。

はっと、眼をあいてみると、私は部屋の中なかにねているのでした。窓から、斧の音がひびいてきます……。

私はとび起きました。窓をあけてみると、ぱつと朝日の光がさしていて、向こうの桜の木立かたきのなかの大きな一本の枯木かれきが、切りたおされかかっているところでした。

私はいそいで着物をきて、そこに行ってみました。桜の枯木はもう根本ねもとを切られて、ぐらぐらしていました。それを、二三人の村人むらびとが、縄なわで引っぱりました。枯木は大きくゆらりとうごいて、それからさつと横よこだおしにたおれました。ほかの木の花がひらひらとちりました。

正夫が涙ぐんでそれを見ていました。

枯木のたおれたあとには、びつくりするほど、青い深い空が見えました。私はその明るい空を指さして、正夫にみせてやりました。

二 なまず

山奥といつても、南方なんぽうのことですから、夏はそうとうに暑く、水のほとりがなつかしくなります。

家から二三百メートルのところに、きれいな川がながれていました。川床かわどこは岩や小石で、ところどころに深みをつくり、そこには柳や杉などが岸にしげり、また浅瀬あさせとなり、そこにはこまかい砂で、芹せりや藻もなどの水草がはえて、小さな魚がおよいでいました。そして少しかみてが、滝とも瀬せともつかない急な流れでゆきどまりとなり、その下に、大人の胸ほどの深さのひろい淵ふちをこさえていました。

私と正夫とは、よくその川へあそびに行きました。

泳げるほどの大きな川ではないかわりに、水が清くつめたくて、飲んでもよさそうに思えるほどでした。浅い瀬にはいつて、美しい小石をひろったり、水草の間の小魚をつかまえたり、岸にねころんで釣りをしたりすると、いつまでもあきませんでした。

かみての急流きゅうりゅうのところ、それを村の人たちは滝といつて、滝の下の淵をきれいなも

のとして、よこてに小さな石のほこらなどがまつつてありました。そこへ、私たちは朝おきるとすぐ、顔を洗いに行くこともありました。

ある朝、そこで顔をあらつておりますと、正夫が、あれツと叫んで、水にぬれた顔のまま、目をまんまるくうちひらいて、淵のなかを見つめました。

「なんだい」と私はたずねました。

「なまず……とても大きななまずが……金色の髭ひげをはやして……」

のぞいてみましたが、私には見えませんでした。もう岩にかくれたと正夫はいいました。けれど、たしかにいたというのです。一メートルもあろうか、びっくりするほどの大きななまずで、それが、ぴかぴか光る金色の髭をはやして、ゆったりと泳いでいたそうです。

何かの影だったんだろう、と私はかんたんにかたずけて、気にしないつもりでしたが、それでもやはり、忘れかねていたようです……。ある日、私もそのなまずをはつきり見ました。

なまずというものは、おかしな魚ですね。頭がばかに大きくて、その大きな頭いっぱいに、大きな口がついていて、こまかいきれいな歯をくいしばってりき力んでいて、うわくちびる上唇に長い二本の髭ひげをはやし、下唇に二本の短い髭をはやし、そのくせ、ごく小さなかわいい目

でいつも笑っており、頭から尾へすーつとほそくなっています。そのなますが、まったく、一メートルほどもある大きさで、おどろいたことには、ぴかぴか光る金のながい髭をうちふり、小さな目を光らし、いばりくさつて悠然ゆうぜんと泳いでいったのです……。

それを、私も正夫も二人とも見たのです。

「いたでしょう」

「うむ、ほんとにいたよ」

けれども、金色の髭をはやしたなまぐ……そんなものは、まだきいたこともありません。その淵ふちには、村の子供たちが時々釣つりにくることがありました。私はその子供たちに、この淵で大きななまぐを見た者はないかとたずねてみました。

ここではよく釣つり針はりをとられるから、大きななまぐかなんか、そんなものがあるかも知れない、という者がありました。

深いんだからきつといる、という者がありました。

大きななまぐをみたことがある、という者がありました。

そこで私は、金色の髭をはやしたなまぐのことを、話してきかせました。子供たちはびつくりしました。

「まだはつきりはわからないが、ほんとにその珍しいなますがいたら、みんなで生捕ろうじやないか。そしてここに池をつくって、川の水をひきいれて、みんなで飼おうよ。このままにしておくど、どこかに逃げてしまいかもしれないからね」

子供たちはすぐにさんせいしました。そしていろいろ用意をし、手はずをきめて、金色の髭ひげのなまずをまちうけました。

そして毎日、朝から夕方まで、誰かしら番をして、淵ふちのなかをそつとうかがいました。ところが一日たち、二日たち、三日たつても、誰もなまずを見た者がありませんでした。

四日めの夕方、私たちは淵のそばにあつまつて、がっかりしました。なまずはもう逃げたのかも知れません……。

「あ、いたいた……いたよ」

誰かの声がして、みんなで見ると、たしかにいました。大きななますが、金色の髭をはやして、淵の底のほうを悠然ゆうぜんと泳いでいきました。たいていみんなが見たのです。

すぐに、淵のしもての浅瀬あさせに築やなをはりました。これでもてに逃げることはできません。かみては滝ですから、そちらにも逃げられません。もう淵のなかにとじこめてしまつてのです。

ていて、そのきれぎれの雲の一つが、なまずの形になって、金色の髭をはやしていますし、それがそのまま、淵の水のなかにもうつっています。それを、私たちが両方見くらべてるまに、もうすーつと、雲の形はくずれ、淵のなかのも消えてしまいました。

私たちはあつけにとられて、言葉もでませんでした。

けれど、それからというものは、朝や夕方の雲の形に、なんとなまずが多くなったことでしょう。そして淵のなかにも、なんとなまずがたくさんになったことでしょう。みんな、金色の髭をはやした大きな珍しいなまずでした。

三 かき

家のまえに大きな柿かきの木がありました。いっぱいなってるその柿が、秋になると、赤く色づきました。

私と正夫はそれをたくさんたべました。あそびにくる村の子供たちにもわけてやりしました。朝露あさつゆにひえたつめたいのをかじるのが、いちばんおいしくありました。

そして柿は、まもなくなくなってしまう、ただ一つだけ、たかい梢こずえにのこりました。す

つと空たかくつきでた枝の先に、たった一つなっているの、登ることもできず、竿さおもとどきませんでした。それよりも、そのいちばんたかい一つだけは、ただなんとなく残しておいてやりたかったのです。

その一つの柿は、まるで柿の木の旗みたいでした。まんまるな大きなもので、朝日や夕日に赤くかがやきました。

山奥の秋は、早く寒くなります。やがて、柿の葉は黄色くなり、下枝したえの小さな柿や、半分われた柿なども、すっかり熟して、小鳥にたべられてしまい、黄色い葉はだんだんちつていきました。けれど、たかい梢の一つの柿は、もうやわらかく熟しながらも、やはりついでいきました。

私はそれが気がかりになってきました。もうあんなに熟してしまってるのに、いつまでああしてるつもりなんだろう。下におちるかしら。それとも小鳥にくわれるかしら。くわれるとしたら、何の鳥にだろうかしら。

正夫も同じようにそのことを考えていました。

そして私たちは、できるだけその柿かきを見ていることにしました。下におちるか、どんな鳥にくわれるか、それとも……。

家の庭から、その柿がま正面に見えました。風のあたらない、日のよくさす、暖かい片^か隅^{たすみ}に、腰掛^{こしかけ}をもちだして、私は正夫に本をよんできかせながら、二人とも時々目をあげて、梢^{こずえ}の柿をながめました。青くすみかえった空たかく、柿は赤々とかがやいています……。

その柿と同じような赤い着物を、巡^{じゆんれい}礼^{れい}の赤ん坊がきていたのです。巡礼というのは、まだ三十歳ばかりの女で、菅笠^{すげがさ}、手甲^{てっこう}、脚絆^{きゃはん}、笈摺^{おいずる}、みなさっぱりしたみなりでしたが、胸に赤ん坊をだいていました。おずおずと庭にはいつてきて、静かなひくい声でいいました。

「今晚、どこでもよろしゅうございますから、お宿を、お願い申したいんでございますけれど……」

赤ん坊なんかだいているへんな巡礼でしたけれど、その赤ん坊の着物が柿の色と同じようなので、私はなんだか泊めてやりたい気がしました。

正夫も同じ気持ちだったのでしょう。小父^{おじ}さんをさがしに家のなかにかけていって、まもなく戻ってきました。

「泊つてもいいんだって……」

巡礼の女は、うれしそうにおじぎをしました。

「それでは、夕方まいりますから……」

そして出ていきました。

私と正夫は目を見合わせました。どうもへんな巡礼なんです。

「僕が見てきましょう。へんだなあ……」

正夫が巡礼のあとをつけていったので、私は一人でぼんやり夢想にふけりました。

ながい時間がたったようでした……正夫が戻ってきました。巡礼の赤ん坊をだいてるんです。にこにこ笑っていました。

「おかしな女ですよ。赤ん坊をわらのうえにねかしといて、自分はたんぼのなかにはいりこんで、落穂をひろいはじめたんです。だんだん向こうへ遠くへいつちやうんですよ。僕この赤ん坊がかわいそうになったから、だいてきてやりました」

「どれ、かしてごらん」

私はその赤ん坊をだきとりました。赤ん坊はまだすやすや眠っていました。ふうわりと軽くて、まるで綿のようで、頬をつついてみると、つるつるしてやわらかで、かすかに乳の匂いがしていました。

けれど、あんまり軽くて手ごたえがないので、やがて心配になりました。正夫といっしよに、巡礼の女をさがしに行きました。

秋の日がいちめんにてつていました。見わたすかぎり、野山のやまは黄色く、とりいれのあとのたんぼはくろずみ、空は雲一つなく晴れわたつていました。

ピーヒョロヒョロ、ピーヒョロヒョロ……。

とんびの声がします。一羽のとんびが、空たかくゆつたりと舞っているのです。

向こうのたんぼのなかに、五六人の村人たちが、巡礼の女をとりまいて、何やら大声をたてていました。そしてみんな、空をあおいで、とんびを見てさわいでいました。私も見あげました。よく見ると、たくましいとんびで、足に何か赤いものをつかんで大きく円をえがいてとんでいきます。ピーヒョロヒョロと、さもうれしそうにゆつたりと舞っているのです。私は村人たちの方へやつていききました。

近くまで行くと、私の方を見て、巡じゅんれい礼の女が、いきなりかけだしてきて、私にすぎりつき、赤ん坊にすぎりつききました。

「まあ、よかった。ここにいたのね……無事でいたのね……よかったわねえ……お母さんは、あなたがとんびにさらわれたと思つて……さらわれたんだつたら、どうしよう……ま

あ、よかつたわね……」

むちゆうになつて、赤ん坊をだきしめて、さめぎめと泣いてるんです。

私はこまつて、ぼんやり立っていました。

村人たちがあつまつてきました。

「赤ん坊がさらわれたのではなくて、よかつたよ。だが、あれは何だろう」

とんびはなにか赤いものを両足にひきつかんで、その両足をちぢめて腹にくつつけ、大きく羽をひろげて、羽ばたきひとつせず、ふうわりと宙にかがび、さもうれしそうになきながら、舞いとんでいきます。日の光をいっばいふくんだ青い空のまんなか、その姿がつややかに光っています。

村人たちは赤ん坊のいる家の名をあげたりして、心配そうにながめていました。

「あ、そうだ」

柿^{かき}のことがはつと頭にうかんで、私はかけだそうとしました。その私の肩を、誰かがとらえてゆすぶりました……。

正夫が私をゆすぶつてるのでした。

「本をよんで下さらないから、僕うとうとしちやっただです。すると、柿^{かき}がなくなつて

んです」

私もはつきり目をひらいて、見ると、梢こすえの柿がいつのまにかなくなっていました。

私たちは、柿の木の下にかけていきましました。けれど、いくら探しても、あのまつかな柿はその辺におちてはいませんでした。わずかな間に、小鳥がたべてしまったはずもありません。

とんびは……やはり一羽、空高く舞っていました。足には何にもつかんではいませんでした。ただいかにもうれしそうに、ピーヒョロヒョロと、ゆったり舞っていました。

四 山こぞうの小僧

山のなかには、冬になると、天気が変わることが多く、そして雪がふりだすと、なかなかやまず、十四五センチもすぐにつもってしまいます。

そういう時、私は西洋室の方にうつって、だんろに薪まきをどしどしたきます。正夫も私のところで、夜おそくまで話しこんでゆくことがありました。

正夫は星の話をきくのがすきでした。私は知ってるだけのことを話してやりました。太

陽系のこと、ことに金星のこと、それから水星や火星や木星や土星のこと、大熊星座おおくませいぎのなかの北斗七星ほくとしちせいのこと、小熊星座のなかの北極星のこと、次には、アンドロメーダ星座、ペルセウス星座、牽牛星けんぎゅうせいと織女星しよくじよせい、銀河ぎんがのこと、彗星すいせいのこと、そのほかいろいろのことを話しました。そして私がびつくりしたのは、正夫が空の星の図を、名前はおわらないでもよく知ってることでした。

「さびしい時には星をみるがよいと、何かで読んだことがありました。それで僕はよく星をみてるんです」

正夫はそういって、でもさびしそうにほほえみました。父も母も小さい時になくなって、正夫は一人者なので、小父おじさん夫婦のところにはひきとられてるのです。

「星をみると、ほんとにいいんです。だれか親しいやさしい人が、こちらをじつと見ていてくれるような気がしますよ」

それから正夫は、またさびしくほほえみました。

「冬になると、星の見えることが少ないからつまらないんです。それに、こんなに雪のふる晩は、急にさびしくなることがあります。だれか今にも来そうですねです。僕がよく知ってる人だが、どんな人だかはわからない、そういうへんな人が、やって来るような気がし

ますよ」

私はだんろに薪まきをくべて、さかんにもやしました。あまりあつくなると、らんまの小窓を少しあけました。外には雪がふりしきっていました。

「でも、そんなへんな人でなく、おもしろいものが、ほんとにやって来ることもありますよ」

「どんなものが……」と私はたずねました。

「いろんなものです。鳥けだものや獣けだものや、それから……。あんな小窓をあけておくと、火にあたりにくるんでしょうね、狐きつねや狸たぬきがとびこんでくることもありますよ」

私はらんまの小窓を見あげました。正夫は話しつつづけました。

「それよりも、面白いのは鳥ですよ。いつだったか、部屋いっぱい鳥だらけになったことがあります。雀すずめがとびこんできました。頬ほお白しろがとびこんできました。つぐみがとびこんできました。山鳩やまばとがとびこんできました。鳥からすがとびこんできました。そのほかいろいろな鳥が、次から次にとびこんできて、部屋いっぱいにならびました。ふしぎなことには、どれもみなだまつてるんです。目ばかりぱちぱちうごかして、なき声は少しもたてないんです。そしておかしいのは、鷺さぎですよ。みんなといっしょに、小窓からとびこもうとしま

すが、足をまげることをしてしないものだから、その長い足がつかえて、はいれないんです。なんども、小窓にとびついてはおちるんです」

私はまた、らんまの小窓を見あげました。

「それから、いちばんずるいのは、山の小僧こそうですね。なんでしよう、あれは……。一寸いっすん法師ほうしみたいで、そして全身はまっ白で……。帽子をかぶってるのか、髪の毛がのびてるのか、わかりません。マントをきてるのか、身体からだじゆう毛がはえてるのか、わかりません。靴をはいてるのか、はだしなのか、わかりません。ただ、全身まっ白なんです。……ああ、来たんじゃありませんか」

私は小窓を見あげました。

「あんなずうずうしい奴やつはありませんね。おおさむこさむ……。歌でもうたうような調子で、けれど声には少しもださずに、ただそういう顔つきで、小窓からとびこんでくるんですよ」
私は小窓を見あげました。外は雪がふりしきっていました。

「とびこんできて、挨拶あいさつもしなければおじぎもしないで、ひよいとそのへんの椅子いすの上のつかるんです。そしてだまっただまま、笑顔ひとつしないで、じっとしてるんです。あいつがはいってくると、部屋のなかがぞつと寒くなりますよ」

私はなんだか寒くなつて、部屋のなかを見まわしました。

「こつちでじつと見ていてやると、そのままのこのこと部屋の隅すみつこにかくれたり、布団ふとんのなかにもぐりこんだりします。そしてあたりがしいんとしてきて、耳をすますと、まだ外には、仲間がいくたりも、十も百も千も、たくさんいるらしんです。はいつてくるのは一人ですが、外にはおおぜい待つてるんです」

私は耳をすましました。雪のふる音がきこえていました。

「ゆだんしていると、はいりこんできた奴やつが、だんだん近よつてきて、背中にぴたりくつついたり、どうかすると、襟えりの間から懐ふところの中にとびこんできます。ひやりとしますよ……」

私はぞつとして、いきなり立ち上がりました。そしてらんまの小窓をしめました。

もうだんろの火はほそくなつていました。私はあらたに薪まきをくべました。そして、わきを見ると、正夫は肱掛ひしかけ椅子の上に、うとうとと眠っていました。

しいんとした静けさで、雪のふる音だけがかすかにきこえています……。はて、今まで私に話しかけていたのは、いったい誰だったのでしょうか。眠っているところを見ると、正夫ではないし、私自身のはずはないし、ほかにだれもいませんでした。

しんしんと雪のふってる夜ふけです。

私は立ち上がって、そつと正夫をだきよせました。正夫はうつとり目をひらいて、私を見てとると、きつくだきついてきました。それを私はやさしくだきしめてやりました。

だんろの火がぱつともえたつていました。

青空文庫情報

底本：「豊島与志雄童話集」海鳥社

1990（平成2）年11月27日第1刷発行

入力：kompass

校正：門田裕志、小林繁雄

2006年4月29日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

山の別荘の少年

豊島与志雄

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>